Monthly Contents（月刊誌の主な特集記事）

デンタルダイヤモンド／2014．3月号

○実践歯科ライブラリー：シングルファイルシステムが歯内療法を変える

（阿部　修・五味博之・石井信之）

＊根管形成においては、Ni-Tiファイルが主流となっており、数本のファイルシステムからシングルファイルシステムへと進化してきている。本特集では、日本で認可されている「wave one」「RECIPROC」「SAF（Self Adjusting File）」について、その特徴・使用方法、注意点などを詳述している。そして最後にまとめとして、シングルファイルシステムは、低コスト簡便かつ安全な根管形成が可能であるが、すべての症例でシングルファイルシステムで完全な根管形成が達成できるわけではなく、必要に応じて、ハンドファイルや細いNi-Ti ファイルを併用する、術者の姿勢が重要であることが示されている。

○rinsho. com：“インフォームド・セレクション”を生かしたPD臨床（加藤光雄）

＊一般的に“インフォームドコンセント”という言葉がよく使われるが、概して一方通行の押しつけとなって術者のエゴに陥りやすく治療効果も患者の満足も得られにくい。インフォームド・セレクションとは、「患者さんに可能性のある治療の選択肢とその得失について説明し、患者さんに治療法を選択してもらい、歯科医師はその選択が歯科医学的に妥当かつ実行性のあるものかを専門家の目で評価する。この方法での治療例を提示して、この方法であれば、患者が主体となって自己決定するので、治療への協力が得られやすく、患者教育や衛生指導などにも効果が表れやすく、患者満足度も高いとしている。

歯界展望／2014．3月号

○特集／天然歯周囲組織とインプラント周囲組織　2

―歯周炎、インプラント周囲炎の正確な理解と対応に向けて―

（小方頼昌・宗像源博・熱田　生・竹内康雄・松井孝道・山本松男）

＊本特集は、先月号のPart1「天然歯周囲組織を見つめなおす」に続き、今月号はPart2として「インプラント周囲組織を見つめなおす」ということでインプラント周囲組織の防御機構に関する最新知見を整理している。まず天然歯周囲とインプラント周囲の共通点と相違点について簡潔に列挙している。相違点としてインプラントにはセメント質がないため、歯根膜が存在せず、骨結合していることはご存知の通りである。次にインプラント周囲組織の特異性について、現状と問題点という視点から述べている。たとえばプローブが直線的には挿入できない場合もあり、検査そのものもできない、などである。３番目に上皮封鎖性の研究についてである。天然歯同様生物学的幅径としての封鎖は存在するが、明らかに低封鎖性だそうだ。さらにインプラント周囲の細菌叢また、表面の各種除染戦略にも触れている。

ザ・クインテッセンス／2014．3月号

○歯原性菌血症を正しく理解する（花田信弘）

＊スケーリングや抜歯などの“医療行為”で発症する歯原性菌血症は、どの歯科医も注意を払っているところです。しかし、本当に怖いのは、“日常性”の歯原性菌血症であることを歯科医、患者も十分に認識しているのでしょうか。重度歯周病患者では、咀嚼によっても口腔内細菌が血中に侵入します。また、アルツハイマー型認知症や自己免疫疾患との関連や臓器の老化にデンタルプラークが関与することなどが報告されています。歯性高血圧症という新しい概念も提唱されています。著者は歯科医院で医療行為だけでなく、保健指導が実施されれば介護の費用や総医療費が抑制されると結ばれています。

○舌の痛みにどう対処する？（和気裕之　澁谷智明　中久木康一　他）

＊「ピリピリする」「ヒリヒリする」あるいは「違和感」といった表現で、患者は舌の痛みの症状を複雑に訴えて来られます。問診をして、正常な舌の状態を知った上で肉眼的異常が認められれば、口内炎から舌がんにいたる鑑別をします。それ以外の場合は、詳細な医療面接を行い、三叉神経痛などの神経障害性疼痛か舌痛症などの心因性疼痛を疑います。舌アトラスを参考にして、その手順を解説されています。専門医への紹介状の書き方、歯科医院での検査法、口腔乾燥症についてもふれています。

日本歯科評論／2014．3月号

○特集／低侵襲をコンセプトとするインプラント治療の新たな可能性（小川隆広　行田克則　他）

＊現在歯科治療において、インプラント治療は完全に欠損補綴の選択肢の１つとして定着しました。しかし患者さんにとっては、インプラント手術は大きなストレスであることには変わりありません。本特集は“低侵襲”をコンセプトに安心・安全なインプラント治療をめざしている取り組みを紹介しています。インプラント治療をおこなう先生はもちろん、おこなわない先生も是非お読みいただくことをお勧めします。

○＜シリーズ＞歯科は誤嚥性肺炎を本当に予防できるのか？

―結果を出すために知っておきたい誤嚥性肺炎の予防ストラテジー―

第１回　高齢者における誤嚥性肺炎の特徴

―医療・介護関連肺炎(NHCAP)診療ガイドラインの概説も含めて

（松井敏史　井上慎一郎　他）

＊高齢者にとって誤嚥性肺炎は即命に係わる問題です。そしてそれを防ぐため口腔ケアが大きなウエイトを占めるのは間違いありません。本シリーズは誤嚥性肺炎について歯科が知っておかなければならないことを解説していきます。第１回は高齢者における誤嚥性肺炎の特徴。超高齢化社会を迎えるにあたり是非読んでおきたいシリーズです